

令和5年度 益子町立益子西小学校 学校評価書

教育課程 外国語活動・外国語科編

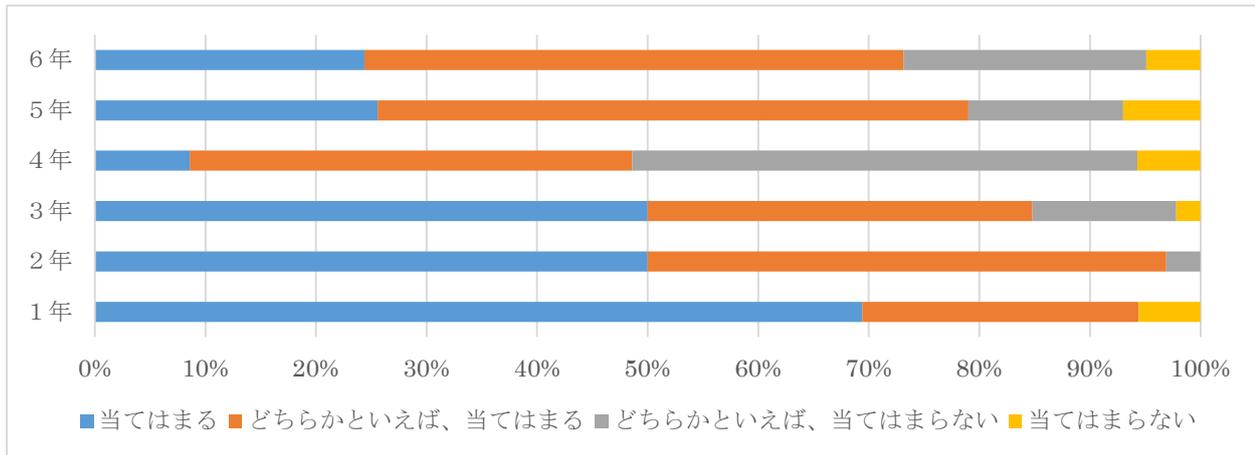
< 具体の評価指標 >

- ・教育課程の適切な実施の下に、学校は明るい雰囲気児童は生き生きと生活している。
- ・外国語活動・外国語科に対する興味・関心、外国語の表現への慣れ親しみ、コミュニケーション能力の育成が十分図られている。

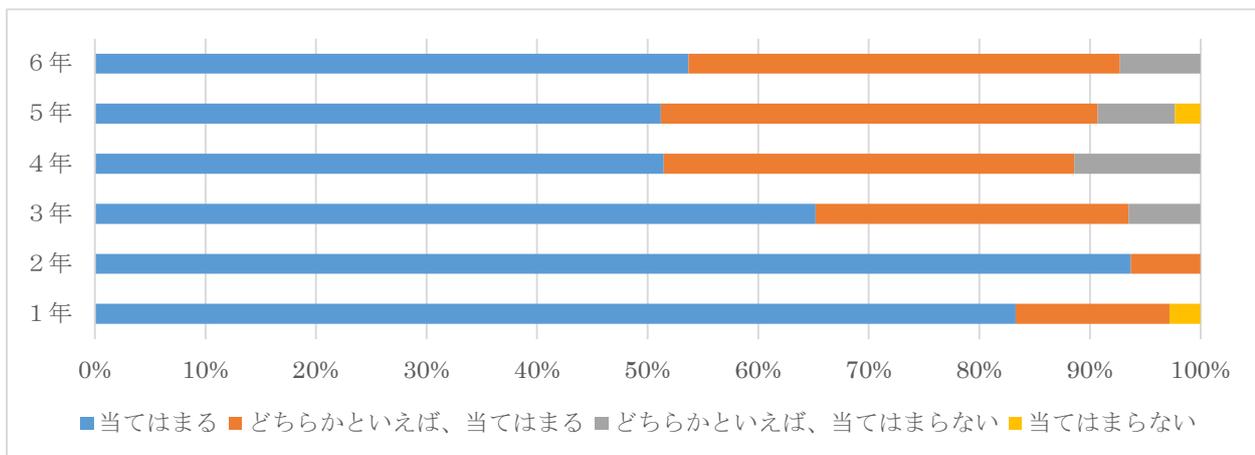
①自己評価

(1) 児童の意欲について (令和6年3月実施のアンケート結果より)

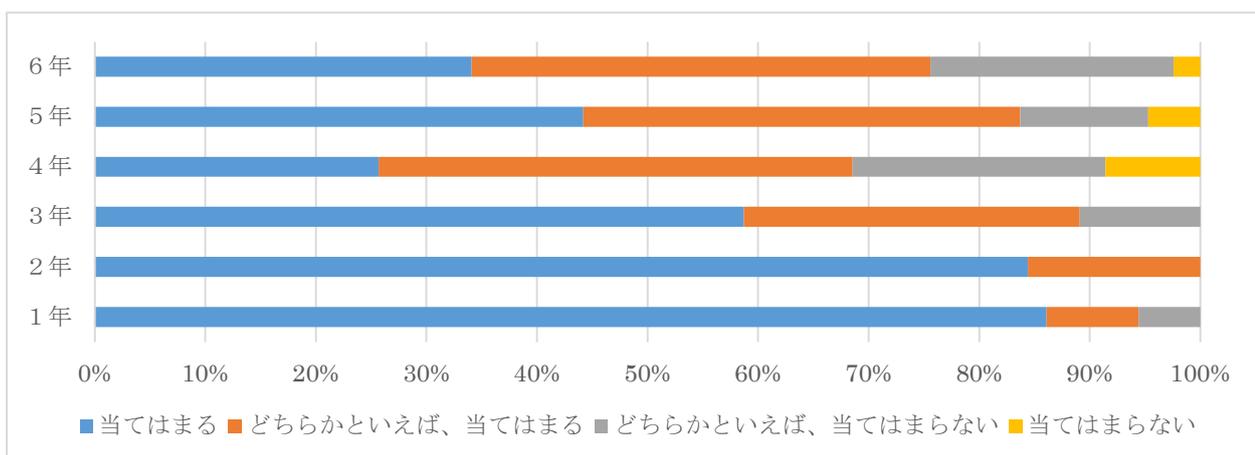
①外国語活動・外国語科の授業は好きである



②外国語活動・外国語科の授業に進んで参加している



③外国語活動・外国語科の授業で、先生や友達とのコミュニケーションは楽しい



〈成果〉

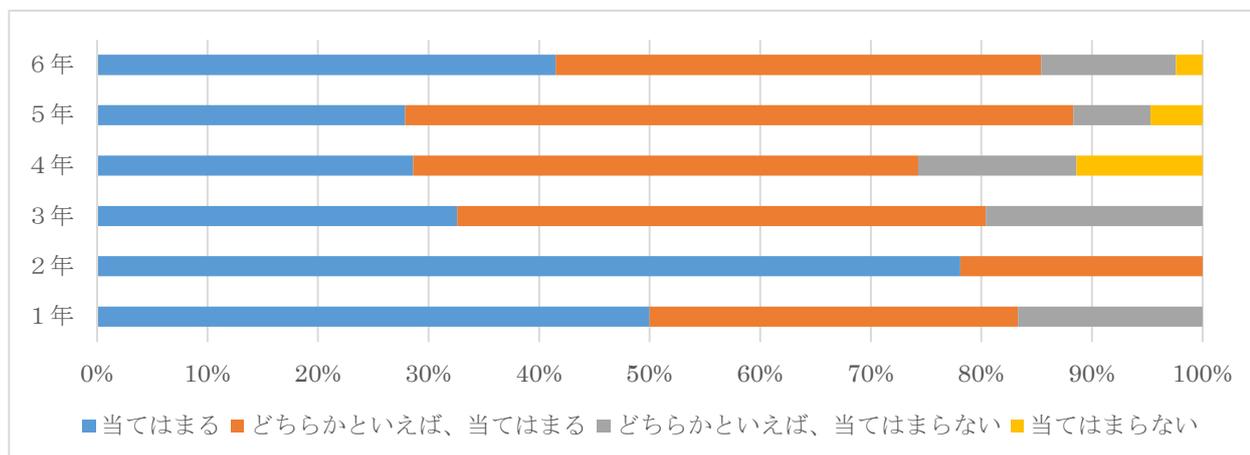
- ・上記3項目の結果から、多くの児童が外国語活動の授業に意欲的に取り組んでいることが分かる。また、先生や友達とのコミュニケーションは楽しいと感じている児童がとて多く、コミュニケーション活動にも意欲的に取り組んでいることが分かる。
- ・「外国語活動・外国語科の授業に進んで参加している」では、肯定的な回答が全ての学年で8割以上だった。多くの児童が意欲的に学習に取り組んでいることが分かる。
- ・「先生や友達とのコミュニケーションは楽しい」では、肯定的な回答が全ての学年で6割以上だった。特に低学年は9割以上の児童が肯定的な回答をしており、コミュニケーション活動を楽しんでいることが分かる。低学年においても、ただのゲーム的活動ではなく、言語活動を通してコミュニケーション活動に力を入れてきた成果だと考えられる。

〈課題〉

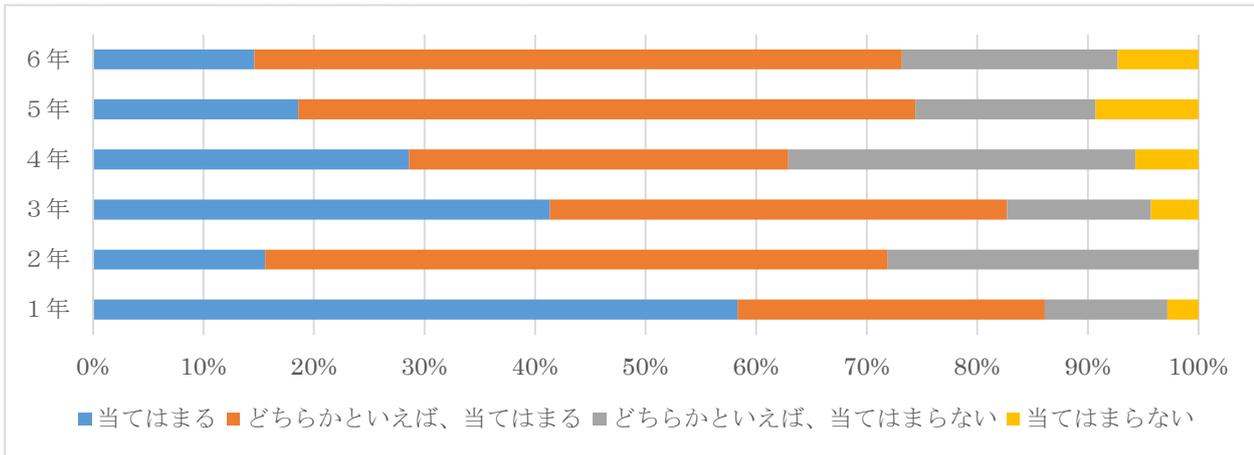
- ・今年度は4年生の肯定的回答が他の学年に比べてかなり低くなっている。使用する英語表現や友達とのやり取りが増えたことで、苦手意識をもった児童がいると想像できる。英語への苦手意識を抱えたまま高学年になると、さらに英語への苦手意識が高まってしまう。意味のある言語活動を通して、コミュニケーションや学習の楽しさを感じられるような工夫が必要である。
- ・各項目、肯定的回答が多いが、高学年になるにつれて否定的な回答も増えている。学習内容が難しくなることに加え、精神面での成長により自分のことを話すことが恥ずかしいと感じる児童が増えてくることなども原因として考えられる。児童の実態に合わせながら、低学年から中学年、中学年から高学年、高学年から中学校への接続がスムーズにできるように、教材や言語活動の工夫や授業改善が必要である。

(2) 児童の英語力やコミュニケーション力について（令和6年3月実施のアンケート結果より）

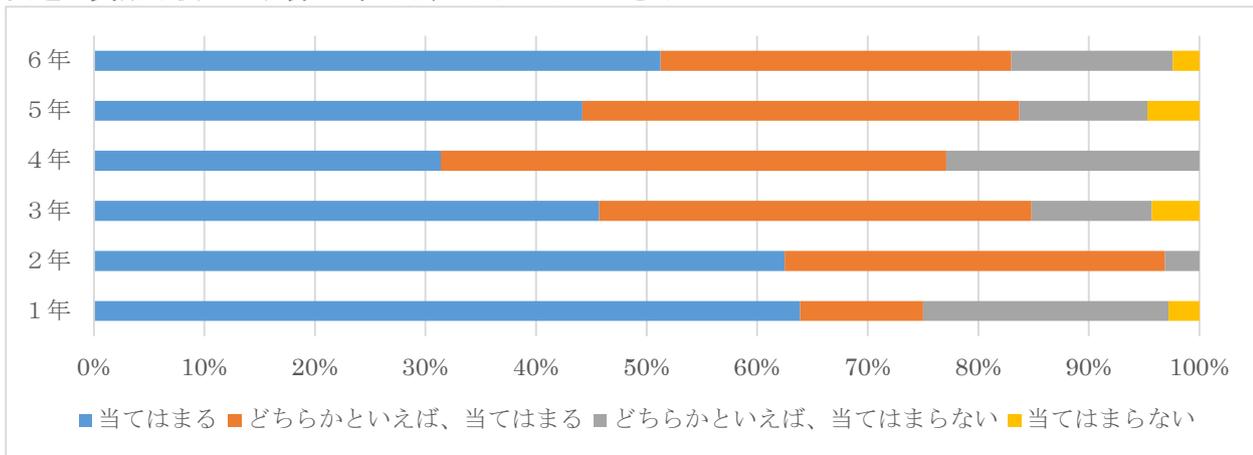
①授業で、英語専科や担任の先生、友達が使う英語の意味がわかる



②授業で、ALT が使う英語の意味がわかる

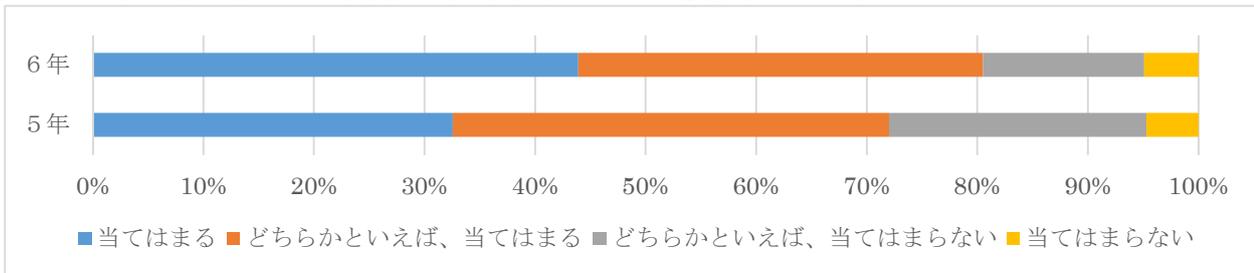


③友達に英語を使って自分の考えを伝えることができる



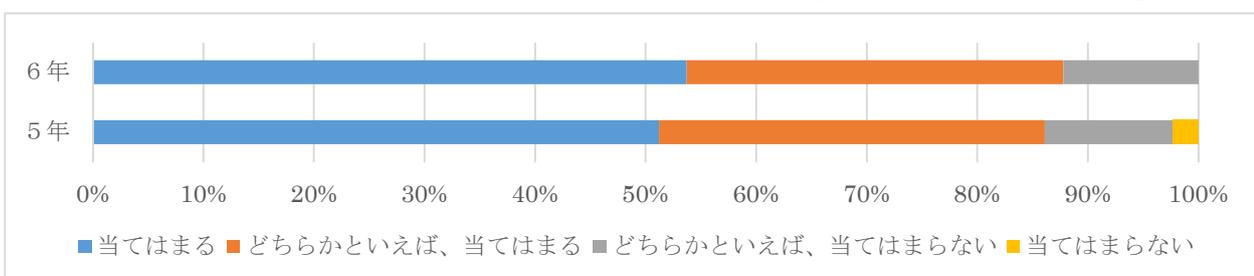
④ 5年生 英語で書かれた名前や教科書に出てくる言葉を読むことができる

6年生 教科書に書いてある英語の文を読むことができ意味がわかる



⑤ 5年生 アルファベットの大文字・小文字や簡単な単語を書くことができる

6年生 教科書や例文を見ながら、自分が伝えたいことについて英語で文を書くことができる



〈成果〉

- ・担任や専科教員、友達が話す英語を理解している低学年と高学年は約8割、中学年は7割以上だった。ALTの話す英語も多くの児童が理解している。どの学年でも教師やALTが英語による簡単な指示や説明を用いながらの指導を継続してきた成果だと考えられる。また、どの学年の

児童も友達やALTとの英語でのやり取りに積極的であることも関係していると考えられる。

- どの学年も7割以上の児童が英語で自分の考えを伝えることができることが分かる。各学年の実態に合わせたインタビュー活動やスピーチ活動を積極的に取り入れてきた成果だと考えられる。
- アルファベットや簡単な単語を読むことができる児童は約7割、書くことができる児童は約8割だった。外国語科で新たに始まった「読む」「書く」活動に児童が意欲的に取り組み、アルファベットや単語の読み書きなどが定着してきていることが分かる。（※小学校での書く活動は、アルファベットの読み書きと単語や英文を書き写す活動となっている。）

〈課題〉

- どの項目でも、ほとんどの学年で約2割の児童が担任や専科教員、ALT、友達が話す英語を理解できないと感じている。読みについても同様である。英語を苦手であると感じている児童への個別指導や丁寧な指導が必要であり、読み書きに関しては、5、6年生の2学年を通した系統的な指導が求められる。また、中学年、高学年からいきなり英語で授業を進めるのではなく、低学年から系統的に指導を行っていく必要がある。その際には、英語で指示する場面を学年に応じて取捨選択したり、言語活動を通してコミュニケーション力や英語力を高めることを意識したりすることが特に大切である。
- 児童の英語力やコミュニケーション力についてでも中学年での否定的回答が他の学年と比べると高くなっていることから、分からないと感じている児童が多いことと児童の意欲の低下には関連があると推測できる。児童にも伝わるような英語を使って話したり、反応を見ながら英語で問いかけたりするなど、児童が安心して学習できるような指導者の工夫が必要だと考えられる。